

流れに先見の明があつて自作地にしてあつたので、取り上げられることはありませんでした。

昭和初期の小作争議の波を読んで、金が貯ると田畑を買うのをやめて山林を買つておりましたので、農地開放の波をかぶることもありませんでした。

戦後は、私は朝来町議会議員や農協理事等を努めさせてもらいました。山西の地に散つた戦友の霊のご冥福を祈つておりました。

ボタン一個が命拾い

—独混第一旅団河南省警備—

福島県 高橋 巧

喜多方市は町村合併で市になりましたが、私が生れたのは大正十一（一九二二）年で、当時は加納村と言う静かな農村の農家に生れました。祖母と両親と兄と姉と弟の七人家族でしたが、私が六歳の時に母親が病気で亡くなりましたので、以後、祖母と父親に育てられました。父親は農業で、主として米を作りながら副業に馬車で荷物を運ぶ、現在なら運送業をしながら生計を立てていたようでした。

私は小学校を卒業すると、村の染物屋さんに奉公に出されました。染職の手伝いをしながら尋常小学校高等科に二年間通学させていただきました。卒業してからもその染物屋さんで働きました。

染物屋の職人の技術、例えば新品反物の糊を抜く

405

ための「湯通し」とか、着古した着物の「洗い張り」とか、また「藍染め」に至るまでの一通りの技術を身につけた頃、二十歳の成人を迎えて徴兵検査となりました。

男ばかりとは言いながら多勢の前で丸裸にされて、お尻まで診察されたのは、生れて初めてのことで恥ずかしく思いましたが、結果は「第一乙種合格」でした。後日甲種合格に編入されて、現役兵としての入隊通知が来しました。

昭和十八（一九四三）年三月十日、新潟県高田市の高田部隊に入隊しました。春の三月なのに高田の山々にはまだ残雪がまぶしく見えました。入隊して一週間位は格別作業も教練もなく過ごしましたが、突然集合させられて四種混合の伝染病予防注射を打たれ、終わると三八式歩兵銃やゴボー剣等の軍装品が支給され、翌日から家族との面会も許可されました。連絡を受けて面会に来てくれた父親が「俺が作つて来た」と言つて甘いおはぎを土産に持つて来てくれたのを食べ、「これが今

生の別れになるのでは」と思い胸が熱くなりました。そして目頭がうるんでくるのをこらえながら、おはぎを食べたのを今も忘れることが出来ません。三月二十日になると、初年兵受領の下士官が来て移動を告げられ、軍装品を身につけて高田駅から汽車に乗つて下関に到着、夕方港から乗船しました。翌日の朝早く朝鮮の釜山港に上陸し、歩いて駅まで行き、今度は貨車に乗せられて山海関を通過し、天津も過ぎて北京に到着しました。

旅団の所在地は中国名で邯鄲と言う所で、第七十四大隊は彰徳と言う所だと教えられました。生れて初めて中国へ連れて来られた一兵士は、地名どころか方角も分かりませんでした。

北京からまた貨車に乗せられて旅団の在る邯鄲に到着し、今度はトラックに乗せられて彰徳の第七十四大隊本部に着いたのが三月二十七日でした。そこで班の編成があり第一班は小銃班、第二班は軽機関銃、第三班は擲弾筒と言うことで、私は第一班の小銃班に配属されました。班長は野原軍曹

406

で、班の教育助手として上等兵二人が我々初年兵の指導や世話をしてくれました。

翌日から一期検閲の教育が始まりました。大陸特有の暑い日が続き、加えて毎日の戦闘教練は本当に過酷なものでした。

六月の初め頃、突然下痢をして診察を受けましたら赤痢と言う伝染病と診断されて、直ぐに大隊本部に在る兵站病院に入院させられました。赤痢菌などと言う細菌が、どうして私の体内に入ったのか分かりません。一日に何回もトイレに、部屋へ帰るとまたトイレに行きたくなる、と言う変な病気になるって、「俺もこれで終りか」と思ったのです。幸いに二十日間の入院で全快し、退院して原隊に復帰、再び教練に励みました。

八月初めに、一期検閲が終わった昭和十八年九月、重機関銃教育のため第三中隊本部は北支の大名と言うところに移駐させられ、そこで重機関銃教育が始まりました。隊長は野中中尉殿でした。重機関銃を分解してその銃身を担いで駆け足で運搬す

準備が終わった時に、共産八路軍に包囲されて大戦闘になり、食事も取らずに戦争になったこともありました。敵の銃弾が私の胸に命中しましたが、奇跡的に軍服の胸ボタンが一個無くなっただけで怪我も無く、命拾いしたこともありました。

昭和二十年八月十五日、河北省の豊台と言う所にある補充馬廠で、獣医下士官の予備下士官教育隊（方面軍から集まった教育隊）六十人位が教育中に、突然休憩を告げられて、廠員全員が集合してラジオの玉音放送を聴くことになりました。私たちの所にも玉音は聴こえてきました。雑音がうるさくて、私には良く聴き取れず、また意味も良く分かりませんでした。

放送が終わってから終戦になったことを知らされ、日本の敗戦を聞かされましたが、部隊はそのまま現地に駐留していました。

昭和二十年十月になって蒋介石の軍隊が北京に入ってからようやく武装解除となりました。その間にも私たちは食糧補充のために毎日畑を耕して

る作業は大変な労働で、しかも山道などは命懸けでした。二期検閲も終ってまた原隊に復帰しました。

十月に入って補充兵が二十人程入って来ました。昭和十九年三月になってまた、初年兵が何人か入隊して来ました。そして河南省の邯鄲にある旅団本部へ移動させられ、第三期教育は獣医学の教育でした。

馬の取扱いから蹄鉄作製や馬の足に蹄鉄を取り付ける作業など、馬に関する一通りの教育でした。また各中隊を回って、馬の蹄鉄に異状ないか、取付けが完全かなどを巡回して調べたりする、実地教育もありました。

六月初旬頃に第三期検閲が終わって原隊に復帰しました。

八月一日より将校当番となり、共産八路軍の討伐に参加しました。この地域は共産軍の他に土匪も多く暗躍しているため、討伐には何回となく出動しました。野戦地において野営の準備や夕食の

野菜等を作って過ごしておりました。

十二月になると日本の居留民が現地に集まって来ましたので、私たちの食料を分けてやったりしました。日が経つにつれて、蒙古方面からも日本の難民が集まって来て、居住する場所にも難儀するようになりました。

昭和二十一年の八月になって、天津の近くにある中国名でタークと言う港から、アメリカ軍の上陸用舟艇「リバテール船」に乗せられて、昭和二十一年八月十七日、佐世保港に上陸して、汽車で生れ故郷へ復員することが出来ました。

お金は有りませんでした。復員証明書で汽車は無料で乗ることが出来ました。喜び勇んで復員しましたが、東京はじめ大都市は焼野原で、しかも人間の生きる基本である衣食住がほとんど無い、店も一軒も有りませんでした。

この荒れ果てた祖国復興のためにと、また染物屋に働きに行きました。古着の染め直しとか種々の仕事で寝る間もないほどの忙しい毎日でした。

そして復員して二年後に結婚して独立し、染物店を開業しました。

時代と共に染色の技術も向上して、特に化学繊維の開発によって染物の原料も化学原料となり、驚くほど進化しました。現在は店を長男に任せて隠居の身となり、春は山菜採り、秋はきのこ等を求めて山歩きをしたりして、健康の保持と趣味を兼ねて平凡に生きております。